



燃える南大橋の欄干と逃げる人々 / 佐伯 千代香 作 (広島平和記念資料館 所蔵)

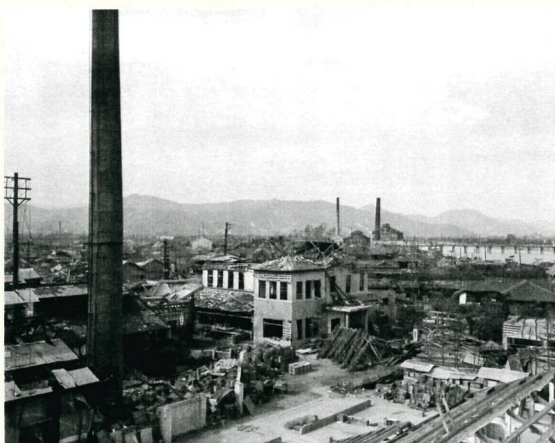
た。「風上へ逃げよう」私は初めて空を見上げた、薄暗い空一杯に黒煙がゆっくり渦巻いており、風向きは何となく南からのように思えた。

ふと、吉島本町の自宅に帰るのがベストと判断、痛む手を庇いながら小走りに鷹野橋を南に引き返した。

原爆投下直後だった為か、路上で他の被爆者の姿を見かけた記憶がない。ただ一人だけ防空頭巾に黒モンペ、背負い袋を着けた中年の婦人が、くすんだ顔色で放心状態のまま空を見上げていたのを鮮明に記憶している。南大橋の200メートルくらい手前の、私が下敷きになった地点まで来た時、教科書・ノート・大切な弁当・学生帽を思い出し、脱出した隙間からのぞき込んで見たが、何ひとつ発見できなかった。

当時はまだ木造だった南大橋の北側欄干の一部が燃えていた。火の気のない橋がなぜ燃えているのか？、米機は黄燐焼夷弾を使ったのか？、強い閃光や爆風は？、なのに摺り鉢状の爆発孔が無いのはなぜなのか？、何もかもが不可解なことばかりであった。爆心から1.5軒南、日赤病院裏の路上で被爆したその1分くらい前に南大橋の上からB29を目撃、「単機での飛来」「重爆機らしからぬ急旋回」それらの特異行動が重大な意味をもっていたとは、B29とその単独行動をなめ切っていた当時の私には、及びもつかないことであった。後日原子爆弾のことを知り、投下直後から自分の間はこれを皆が「ピカドン」と云ったが、私には「ピカ」だけで「ドン」の方は全々聞こえなかった。

自宅に向かって元安川右岸の土手を南下する途中、背中に赤ん坊を背負い左手に幼女、右手に風呂敷包みを持った子連れの中年女性を見かけた。彼女は裸足のまま子守歌らしきものをつぶやき、よろけながら歩いていたので、追越しぎわに思わず「おばさん、しっかりしなさいよ、負けちゃーいけんんで！」と声を掛けたが、バサバサ髪と虚ろな目に生氣はなく、返事もなかった。



中国塗料より南大橋を望む / 米軍 米国防略爆撃調査団 撮影 (広島平和記念資料館 提供)

中国塗料株式会社の横を通った頃から、何となく家屋の損壊の程度が軽くなっているように思われ、我が家の屋根が見えた時には倒壊を免れたことに、心の底から安堵の感を覚えた。

半壊状態の我が家へは勝手口から帰宅した。台所に居た母を見て「オッカー、ヤラレタ」と私、母には焼け爛れた顔に頬冠りした異様な姿の私が、声を聞くまでわからなかったようであった。「お！ゲンか、こりゃー火傷じゃ、油、油！」と言いながら手斧で調理台の下扉を叩き割り、大豆油を布片に付けて顔と両手両脚に塗り付け、カーテンを破って指にも一本ずつ巻いてくれた。

私は「オッカー、負けんさんなよ、負けちゃーいけんんで！」と言い続けた、母は「お、わかつとる、わかつとる…ひどいことになつとる、どこでやられたと問いかけた。あの時の市内の誰もが思っていたように、母は自宅の至近距離に投弾されたものと思い込んでいたようである。私は手短かに経過を話した。

仮の手当てを受けながら、私が目にしたものの耳にしたものは、近所の時森さんの二階に干してあった布団が燃えていること、吉田さんが「大怪我をした、助けて！」と大きな声を出していることなどであった。火災の発生が一番怖い「火を消せ、火を消さなやー！」と母、火は間もなく消し止められたようであった。

母には市内がどれ程ひどいことになっていたのか、全くわかっていなかったのだらう。「この傷じゃーとても手に負えん、中島小学校当時水主町」の救護所へ行きなさい、姉さんをついて行かすけー」と私を急かした。たまたま無傷だった上の姉が非常用品を入れたリュックを背負い、私は小さい毛布を持ってしかたなく二人で家を出たものの、市内の状況が私にはわかっていたので、一先ず近くの倉敷航空(株)の救護所へ向かった。

救護所も負傷した工員や動員学徒たちで大混雑、特にガラスでの傷を受けた人が多かったように思う。ここで近所に下宿していた顔見知りの看護婦さんから、手の傷に白い薬を塗り新しい包帯に替えて貰ったが、顔の火傷の方は吉島飛行場の軍医に手当てして貰うよう言われた。陸軍吉島飛行場に行く途中、市内から避難してくる人たちに会ったが、垂さがった手の皮などから見て火傷は私よりも激しく、その容貌は江戸時代の幽霊の絵を見るようだった。